保健体育科研究主題

主体的に学ぶ生徒を育成する体育学習の創造

～「3つの資質・能力のバランスの良い獲得を目指して」～（1年次）

野沢　克美　　村松　裕太　　遠山　詩乃

１．研究主題設定の理由（これまでの研究から）

これまで本校の保健体育科では，平成23年度から平成25年度まで「自ら問う力を育む授業の創造」を目標に研究を進めてきた。これは，体育学習において全ての生徒が身に付つけるべき「思考力」・「判断力」・「表現力」の内容を明確にし，どのように整理すべきかを目指した研究であり，学習指導要領改訂の要点と合致していた。特に，各単元において，どの場面で生徒が「問い」を強く意識して取り組むのか，またその「問い」を生徒自らが主体的に考えるための指導には，どのような方法が有効かを探ってきた。その結果，教材・教具の工夫や応用的・発展的な練習を効果的に取り入れることによって「問い」を強く意識し，課題解決に向けて取り組むことがわかり，それらを意図的・計画的に授業へ取り入れた。

平成26年度からの３年間は，『「深く考える」授業の創造』と全体研究主題が設定された。保健体育科では，授業の中に「考える」場面を多く設定することは難しいと感じていた。これは生徒同士の話し合いやアドバイスを交換する時間を多くとることで，「考える」ことは可能であるが運動量が減少してしまうという問題が出てくると考えたからである。体育学習では個人で活動する場合のほかに，ペアでの補助や教え合い，ICTの活用を含めグループで協働的に学習することも多い。その際，教え合った内容や他者の意見を，個人カードやグループノートに書かせ，自己表出の方法を工夫しながら自分たちの考えを発表するといった活動を実施し，「思考力」・「判断力」・「表現力」等の育成を図り，自分が「理解していること」や「できること」を他者に伝えたり，表現したりすることが「わかる⇔できる」につながる要因と考えた。これを実現するためには，生徒個人が課題に対する自己の見解をもち（Plan），それを示し合ったり，表現したりすること（Do）によって共有・共感，吟味し（Check），新たな認識の高みに至る（Action）という過程が大切になってくる。この「共有・共感，吟味」が，授業の中で数多く見られ，互いに高め合うことができるよう「問い」をもたせ，活動しながらも「考え続ける」場面を設定することで練習する（運動量の確保）ことと振り返り（「深く考える」）を効率よく設定することに重点をおいた。

研究の成果として，授業で生徒に提示する「めあて」を工夫し，課題に対して一つの答えを目指すだけでなく，答えにつながるヒントやいくつもある答えの中のどれかを見付けることができるような投げかけをしたり，全体でそれぞれの考え方を共有する場面を継続的に設定したりすることで，吟味（Check）し思考を働かせる（Action）生徒の姿を見ることができるようになった。既習事項から考え出された解決方法が最善であるのかどうかを検討するために仲間に協力してもらったり，表現して伝えたり，意見交流をしたりして，より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身に付いてきたこと，さらに，自分自身の考え方だけで完結するのではなく，自分自身の考え方が正しいのか，それとも他に何か良い方法があるのかと思考錯誤する生徒の姿は，これまで保健体育科が「自ら考え，主体的に取り組む体育学習」について研究してきた成果であり，視点が変わる見方からの課題に対するアプローチによって生徒は「深く考える」状態となって学習に取り組んでいたといえる。

こういった「学び」に対する姿勢が，授業だけでなく日常生活にも発展し，生きる力となって発揮されることが今後の目標であり，保健体育科が目指す生徒の姿である。つまり，授業を通して身に付けた学び方や態度，高まった力を学校生活や実社会に出た時に発揮できる生徒の育成を目指すことが，新学習指導要領の方向性とも合致すると考えた。そこで今年度の研究主題を「主体的に学ぶ生徒を育成する体育学習の創造」と設定した。

２．研究の方向性

（１）教科研究について（全体研究との関わり）

今年度の全体研究主題は，「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」である。予測困難な社会を生きていくために必要な資質･能力，また，これからの教育に求められる学習の在り方について研究を進めていくことが示された。現代社会は，工業による物の生産を礎とした産業社会から，知識の創造と活用が駆動する知識基盤社会へと社会構造が大きく転換された。そこには唯一絶対の「正解」は存在せず，その状況における最適解をそのつど自力で，あるいは多様な他者と協働して生み出すしかなくなり，学校では内容中心から資質・能力育成へと，その原理を転換することを余儀なくされている。将来の社会がこうなっているからこういう人間を育てようという社会適応型の考えではな

く，将来の社会を自らつくっていくような社会創造型の人間を育てるという考え方が必要になってくる。

したがって保健体育の授業では，「主体的に学び，協働・対話を通じて多角的に考え，学習内容を理解しながらより良い解決に向かう学習活動を実践していくこと」が求められる。「知識」「スキル」「人間性」「メタ認知」の獲得（向上）に繋がる授業とは，どのような手立てが有効なのか，見取る評価方法はどのように明らかにしていくのかについて研究を進めていきたい。生徒が保健体育の授業に主体的に取り組み，「わかる」「できる」「仲間とかかわる」活動を通して「もっとやりたい」という新たな意欲喚起へと繋がることで，これからの「新たな世界」や「困難や苦しい状況」に直面しても，しなやかに対応してより良い解決に向かえるような生徒に育つと考える。生徒が生涯にわたって豊かにスポーツに親しみ，健康であり続けるための体力や実践力を高められることを目標にし，保健体育科が目指す生徒像を設定した。

（２）保健体育科の目指す生徒像

新学習指導要領では保健体育科における「見方・考え方」を次のように示している。

○	体育の見方・考え方	自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」等の多様な関わり方
○	保健の見方・考え方	疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上，健康を支える環境づくり

このように示されている体育・保健，それぞれの見方・考え方とは教科等の本質に関わるものであり，これを働かせる機会を教科の中で計画的かつ効果的に使うことでより洗練され，鍛えられる。この見方・考え方を意識した単元・授業計画を進めていくことが，３つの資質・能力（生きて働く知識・技能，未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等，学びを人生や社会にいかそうとする学びに向かう力・人間性等）を育成することへとつながっていくのだと考える。

例えば体育の見方・考え方では，球技（ゴール型）において，「空いているスペースに走り込んでシュートを打つためにはどうしたらよいか」という課題に対して，自ら考えた仮説や他者の動きを観察（「みる」）したり，アドバイスやコーチングし合ったり（「支える」）する中で，自分自身や仲間のボール操作によりゴール前での攻防に挑戦（「する」）していく。そして，その結果改善や解決を図るために，他者や自分自身の動きの観察（「みる」）からもう一度伝え合ったり（「支える」），球技（ゴール型）の特性やルール等の観点，既存の知識や授業の学習を通して理解した知識（「知る」）から答えを導きだそうとしたりする。

保健の見方・考え方では，「健康な生活と疾病の予防」を学習した生徒が，主体と環境の相互作用が健康に直結していることを理解し，健康の保持増進に努めた生活を意識できるようになったり（疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上），「健康と環境」において空気の衛生的管理を学習した生徒が，空気中の二酸化炭素濃度の重要性を理解し，日常的に換気を行おうとする視点をもったりする（健康を支える環境づくり）ことが，見方・考え方を働かせていることである。

そこで保健体育科の研究主題に沿って以下のように目指す生徒像を設定した。この３つの生徒像の先には，生徒が生涯にわたって健康の保持増進に努めるために，豊かなスポーツライフを実現することができるものだと考える。

保健体育科として目指す生徒像
○　運動やスポーツの楽しさや喜びを見いだすことができる生徒
○　体力の向上を目指しながら，公正，協力，責任，参画，共生，健康・安全の視点がもてる生徒
○　自己を知り，適性に応じて「する・みる・支える・知る」ことができる生徒

３．研究の目的

生徒が，授業で運動やスポーツの楽しさや喜びを味わうことができ，生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現できるために生きてはたらく知識・技能を身に付け，健康の保持増進のための実践力や体力の向上を目指し，習得したことを学校生活で発揮し困難な状況下においても粘り強く思考して判断したことを表現しながら打開（レジリエンス）することができる生徒を育成する。

４．研究の内容

（１）知識や技能の習得に偏ることなく３つの資質・能力をバランスよく育むための「単元・授業計画」の作成。

（２）主体的・対話的で深い学びの過程が授業で図られるための「見通し」と「振り返り」の工夫。

（３）「見方・考え方」を働かせた学びを通して育成した資質・能力を見取る学習評価。

５．研究の具体的な内容

ア　単元・授業計画の作成

３つの資質・能力をバランス良く身に付けさせるために，単元及び授業計画を作成し，学習過程の工夫を図る。

イ　主体的・対話的で深い学び

運動の楽しさが発見できる導入の工夫，見通しと振り返り，課題解決に向けて他者と協力しながら協働的な取り組み，試行錯誤を重ね思考を深められる課題設定や発問。

ウ　学習評価の方法

学習ノートの記述，仲間との協働的な学習の様子，ICT機器による生徒の表現活動の記録，授業での学習に取り組む姿勢や態度。

６．参考・引用文献

文部科学省「中学校学習指導要領」　日本文教出版（2008）

文部科学省「中学校学習指導要領解説　保健体育科編」　日本文教出版（2008）

2012年12月　体育科教育，大修館書店　　子供を揺さぶる発問　　大後戸　一樹

2014年　4月　体育科教育，大修館書店　　「教具・遊具」の工夫と開発　　岩田　靖

2017年　4月　体育科教育，大修館書店　　知識基盤社会における学習観の転換　　奈須　正裕

2017年　　東洋館出版社「見方・考え方」を軸とした授業改善　奈須　正裕